英雄

じょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄

【Ｎコード】
Ｎ７３９０Ｆ

【作者名】
じょん

【あらすじ】
肥沃な土地を持つ国、リレバンメル。この国は今、帝国コーンウォールと戦時下にあった。そのリレバンメルにある日、旅人が現れる。彼の名前はローランド。ローランドは卓越した剣技を持つ戦士だったが、彼には人に告げることのできない過去があった。

第一話　来訪

男が道を歩いていた。まとう外套は長旅に痛み、裾はやぶれて泥がこびりついていた。ブーツにもたくさんの傷があり、そこに汚れが染みついていた。顔は日に焼け、空腹や疲労のためか、こころなしほほがこけているように思えたが、その瞳は隠しきれない強い意志を宿していた。男は森に挟まれた街道を歩いていたが、その足取りはおぼつかなく、今にも倒れそうだった。最後に食事をしたのはいつだったか。火をおこす道具もなく、夜は冷たい地面に横たわって眠った。

男は限界に来ていた。しばらく歩き続けていたが、やがて道に倒れた。

「くそ、こんなところで・・・・・・。」男は毒づき、立ち上がろうともがいたが、空腹が限界に来ていた。

「は……まさか俺が…空腹で死ぬことになるとは…誰も…思わなかったろう……。」男はそこで意識を失った。

彼が意識を取り戻すと、そこは荷馬車の中だった。

「お、気がついたか。」男の寝ているすぐそばに、兵士が座っていた。

兵士は古くなってくたびれた鎖帷子を身につけており、剣を剣帯からはずしてわきに置いていた。兜をとった兵士は、思ったより若く、少年の面影が残っていた。

「あんた、道に倒れてたんだぜ。」兵士は言った。男は自分が倒れた時の口に入った土の味を思い出した。

「そうか、君が助けてくれたのか。」一人合点すると、どこに向かっているのか尋ねた。

「この馬車はリレバンメルに向かっている。おれはリレバンメルの兵士、ダグダだ。」兵士は片手を差し出した。

「俺はローランドだ。旅をしている途中だ。」ローランドは差し出された手を握った。
「ローランド、どうしてあんなところに倒れていたんだ？」ダグダは尋ねた。
ローランドが口を開く前に、腹が答えを返した。ローランドは苦笑した。ダグダも笑った。
「こういうことだ。三日も食べてない。何か食い物をくれないか。」
「三日も！そりゃ大変だ。ほら、俺のをやるよ。」ダグダは、馬車の隅にあった朝の袋からパンと干し肉を取り出し、ローランドに渡した。ローランドは金を払おうと財布を取り出したが、ダグダはその手を止めた。
「死にかけの旅人から金を取りはしないよ。それより、三日も仕事をさぼってた胃を働かせてやりな。」そして幌馬車から出て行った。馬車は歩くのと同じくらいの早さだった。
　ローランドはパンをかじり、干し肉を味わって食べた。空腹は何よりの調味料と言うが、その言葉を痛感していた。もらった食い物をあっという間に平らげると、子供たちがしげしげとみつめているのに気づいた。子供の一人が近づいてきて話しかけてきた。

　それからしばらく子供たちと話をして過ごしていると、突然馬車が止まった。次いで、男たちが雄叫びをあげているのが聞こえた。金属がぶつかり合う音がそれに混じる。子供たちや女たちがおびえていると、入り口から男が入り込んできた。
　男はダグダではなかった。目は血に飢えており、手には血の滴る剣を持っていた。
「お、こんなところに女がいるじゃねえか。ガキも一緒か。なんでこんなところに男がいやがる。」男はローランドに気づき、刃物をちらつかせた。
「お前は何者だ。」ローランドはゆっくりと立ち上がりながら言った。

「おめえに名乗る必要はねえ、ここで死ぬんだからな！」男はローランドに切りかかった。ローランドは振り下ろす手をつかみ、ひねった。男が痛みに剣を離してしまうと、ローランドはそれを落ちる前につかみ、男の胸をついた。男は心臓を貫かれた。周りの子供と女は今起きた出来事に驚いていた。先ほどの様子では、とてもこの男が強いとは思わなかったからだ。

「外を見てくる。ここから出てはいけないよ。」ローランドはそういうと、幌馬車から降りた。外は戦闘の真っ最中だ。敵は両側にある森から待ち伏せをしていたらしく、護衛の兵士たちも頑張ってはいるが、数で押されてしまっている。このままでは全滅も時間の問題だろう。　敵はローランドを見つけると、数人がかりで襲いかかってきた。ローランドは一度に繰り出された攻撃を転がってよけると、そのまま敵の一人に切りつけ、立ち上がりざまに一人の手を切り落とした。他の奴らがいきり立って攻撃を続けるも、そのことごとくをかわすかあるいははじき、五人の敵をあっという間にやっつけてしまった。その一部始終をダグダが驚きの目で見ていた。

「君は一体・・・・・・？」ローランドはその質問には答えず、ダグダに尋ねた。

「このままでは全滅だ。指揮官はどいつだ？」兵士は当惑しながらも答えた。

「指揮官は最初の奇襲でやられた。今は指揮をとる者はいない。」

「じゃあ今から俺が指揮を執る。馬車を走らせて包囲を突破しろ。兵士は馬車のわきについて護衛、しんがりは俺が務める。」ダグダはあわてて言った。

「しかし、なんで君が指揮を・・・・・・。」ローランドは有無を言わせぬ口調で怒鳴った。

「つべこべ言わずにさっさとやれ！このまま全滅したいのか！」ダグダはローランドの剣幕に押され、大急ぎで仲間に指示を伝えに行った。ローランドは苦戦している兵士を助け、指示を伝えながら後ろの方へと進んでいった。

ダグダは死んだ馬車の騎手の代わりに馬車の席について馬を走らせていた。同僚がダグダに尋ねた。
「お前が助けた奴だろ、あいつ。さっき、俺と仲間が囲まれて窮地に立たされたとき、いきなり現われて、あっという間に全員倒しちまったよ。それで、俺たちに前のほうに行って馬車を守れって。あの男は何者なんだ？あまりに平然と命令するもんだから、はい！とか言って従っちまったけど。」ダグダは答えに困った。
「俺にもわからない。だが、彼に従わなければ、おれたちは全滅するぞ。今は味方だと信じよう。」馬車は森をぬけて広い丘へと出た。ここまでくれば都はもう目前だったが、門はまだしまったままだった。
「おおーーーーい！早くあけてくれ～！」兵士たちが大声で叫ぶと、声は届いたらしく、城壁の見張りが走っていくのが見えた。
次々と馬車が入ってくる中、最後の馬車がおくれていて、その馬車が森から出てきたとき、そこにローランドの姿はなかった。馬車が門にたどりついて中に入ってくると、ダグダは馬車を降りて子供たちを下している騎手に尋ねた。
「おい、あの男はどうした。」
「彼か？てっきり後ろにいると思っていたが、いないのか？」その質問には中から出てきた子供たちが答えた。
「おじさんはまだ戦ってるよ。僕たちを守ってくれたんだ。」するとその時、森からローランドが馬を全力で走らせてきた。後ろには敵が大勢押し寄せている。
「いそげ、追いつかれるぞ！」城壁の上にいた男たちが大声で叫んだ。ローランドはそれに気づいたのか、大声で呼ばわった。
「弓兵を城壁にありったけ連れて来い！」男たちは一瞬ぽかんとしていた。
「早くしろ！このまま敵を中に入れるつもりか！」城壁の兵士たちはあわてて弓を取りに走った。ローランドは全力で馬に拍車をかけている。と、急に門が閉まり始めた。

「な！？なぜ門を閉めるんだ」ダグダが門衛に大声で怒鳴った。
「私の命令だ。」すると、背後から背の高い男が現れた。リレバンメルの少将、ヘドルだ。
「どこのだれかもわからん奴のためにこの都を危険にさらすわけにはいかん。」
「しかし、彼は身を呈して我々を守ってくれたんですよ！？」ヘドルはフンと鼻を鳴らした。
「それは奴が勝手にやったことだ。それより物資はどうした。」
「そんな、物資なんか持ってくる暇はありませんでした。」
「ばかめ。これ以上難民を増やしてどうする。必要なのは物資だ。彼らなど放っておけばいいものを。」ヘドルは唾を飛び散らして怒鳴った。
「彼らを見殺しにしろというのですか。」ダグダは大声で抗議した。
「そうだ、そしてあの男もな。」ヘドルは今も全力で馬を走らせるローランドを指した。今にも敵に追いつかれそうだ。ダグダは歯ぎしりした。だが、上官にはむかうことはできず、拳を手が白くなるまで握りしめた。
「今だ、放て！」ローランドが大声で呼ばわった。その合図に応えて城門の兵士たちがいっせいに矢を放った。矢はローランドを敵から引きはがした。門までは数十メートル。
　間一髪、馬一頭分の隙間を通ってローランドは都入りした。敵は深追いせず、森へと戻って行った。都では拍手とローランドをたたえる叫び声が巻き起こった。と、ヘドルがローランドに歩み寄った。
「貴様か、勝手に指揮を執ったのは。」拍手はやみ、人々はじっと二人を見た。
「そうだ。指揮官が戦死していて、誰も指揮をとる者がいなかった。緊急の事態だったため、代わりを務めさせてもらった。」ローランドはヘドルに臆することなく堂々としていた。人々は、ローランドのほうがヘドルよりも兵士らしいと思った。ヘドルは高級の衣服を身にまとい、腹が出ていないとはいっても、兵士には見えないのに

対し、ローランドは腕や肩にかすり傷を負っており、ほかにも剣や矢による傷と思われる古い傷があったうえ、剣を握る腕や、敗れた服からのぞく筋肉は引きしめられてなお太かったからだ。
「貴様は何様のつもりだ。勝手に指揮をとり、しかも物資を置いていくなど。」ヘドルは語尾を荒くしていった。兵士たちから抗議の声が上がった。
「そいつは俺たちを助けてくれたんだ。」
「そうだ、おれはすんでのところで殺されるのを助けられた。命の恩人だ。」
「彼は自ら進んでしんがりを務めた。彼がいなければ我々は助からなかった。」次々にローランドを支持する声が上がった。
「黙れ下級兵士ども！！こいつは勝手に指揮をとった罰を受けねばならん。貴様らも、反抗するようなら罰を受けることになるぞ。」周りはしいんとなった。ヘドルは満足そうにせせら笑った。ローランドが口を開いた。
「うれしいか、自分の言いなりになるのが。」
「なんだと？」ヘドルは眉をひそめた。ローランドはたたみかけるように言った。
「上官は第一に兵士をいたわるべきだ。誰よりも無事に戻ってこれたことを喜ぶべきだ。なのに貴様は、その兵士たちを裁くというのか！」
「何を知った口を・・・・・・。」ヘドルがこめかみに青筋を立て始めた。
「彼らが裁かれるというのなら、貴様こそ裁かれるべきだ。」
「なんだと、なぜ私が裁かれるというのだ！」ヘドルは顔を赤くしてどなった。
「お前は馬車が戻ってきたのを見たときに応援をよこすべきだった。もっといえば、この数の村人たちと物資を運ぶのに兵士の数が少なすぎる。あの数では物資か民かどちらかを捨てなければあの場を切り抜けられなかった。もっと兵士の数がいれば、物資も持ってくる

ことができた。これは上官の作戦ミスだ。裁かれるべきは貴様だ！」
周りはワッと叫んだ。
「貴様、言わせておけば・・・・・・！その減らず口を今すぐふさいでやる！」ヘドルは腰の剣に手を伸ばした。が、ヘドルがつかむよりも早くローランドは剣をヘドルの首に振り下ろし、刃がふれるところでピタリと止めた。
「死にたくなければ剣から手を離せ。」ローランドが言った。
「貴様こそ・・・・・。私を殺せば、間違いなく死刑だ。今度は言い逃れはできんぞ。」ヘドルは平静を装っていたが、その声は震えていた。周りはしんと静まり返っていた。
「おやめなさい」凛とした声が響いた。人々が頭を下げ、口々につぶやいた。
「姫さま」
「姫様だ」ローランドはこちらへ歩み寄ってくる女性をちらりと横目で見もせず、しっかりと切っ先をみつめていた。
「剣を納めてください、旅のお方。」ローランドは相変わらず視線を移さず答えた。
「いやだと言ったら？」
「おさめなさい！！」姫は厳しい声で言った。その声は人々を驚かせた。ヘドルでさえ驚いた顔をしていた。ローランドは姫と呼ばれる女性へと目をやった。
「あんたは誰だ。」
「私はこの国の王女、イナメルです。剣を収めてはくれませんか、旅のお方。」
「こいつが剣から手を離したらな。」ローランドは視線を落とした。姫がその視線の先を追ってみると、ヘドルはつかを握ったままだった。ローランドは鞘がないので剣の血を外套の裾でぬぐっていた。
「ヘドル、手を離して。」ヘドルはおとなしく従ったが、敵対心をむき出しにしてローランドをにらんだ。
「先程の非礼をお詫びします。今は戦中の故、兵士も感情が高ぶっ

ておるのです。許してはいただけませんか。」
「あんたが謝ることはない。悪いのは全部こいつだ。」ローランドがヘドルを顎でしゃくった。
「おい、姫様になんて口を！！」周りから怒りの声が上がった。
「よいのです。この方は身を呈して私の民を守ってくださったのに、感謝の代わりに罵倒し、罰を受けさせようとさえしました。非は私たちにあります。」
「しかし・・・・・。」王女はふふっと笑って言った。
「でもありがとう。私のために怒ってくれて。」抗議の声を上げた者たちはうれしそうに礼すると、口をつぐんだ。
「愛されてるんだな、あんた。」ローランドはイナメルをみつめる目線や、そのイナメルと話をしているローランドへの非難と嫉妬の視線を見て言った。
「ええ、それはとてもうれしいことです。民は国の宝ですから。何よりも大事にしなければいけないのですが、戦のために兵を失うのは悲しいことです。」
「国の宝ね・・・・・。皆あんたみたいな考えだったらいいんだが。それより、戦中といったな。しばらくここから出られないのか？」
「はい、残念ながら。この都は三方を山に囲まれており、この正門と、山を抜けるトンネルがあるのですが、背後から襲われないようにトンネルは封鎖してしまったのです。」イナメルは山を順々に指し示し、最後に正門とその反対側の山のふもとを指した。
「くそ、足止めか。」
「申し訳ございません。宿代は私が支払います。しばらくはここにいてもらうことになります。」
「まぁ、仕方ないな。今出てもやられちまうだろうし、おれは恨みを買っちまったろう。宿はどこか教えてくれないか、あんた。」
「あの、私はイナメルといいます。あんたと呼ぶのはやめていただけませんか」王女はいささかムッとしていった。
「そりゃ悪かった。イナメル、案内してくれないか。」イナメルは

はっとした。
「どうかしたのか？」イナメルは首を振ると、そそくさと言った。
「いえ、なんでもありません。宿はこちらです。」イナメルが歩きだすと、ローランドはあとに従った。群衆もぞろぞろ後を付いてきた。
　イナメルはローランドを宿に案内すると、宿主にお金をたくさん払った。宿主は驚いて言った。
「姫様からお金を受け取るなど、しかもこんなに。受け取れません。」
「よいのです。彼に温かい食事とベッドを。」そしてローランドのほうを向いて言った。
「せめて滞在中はゆっくりして行って行ってください。ええと・・・・・・。」
「ローランドだ。」
「ローランド様。今日はありがとうございました。皆を守ってくださって。」
「ローランドでいい。こっちこそすまないな、宿代を払ってもらって。ちょうどすっからかんだったんだ。」ローランドは自分の財布をたたいた。かすかな金属音すらしない。王女は口に手を当て、上品に笑った。
「いえ、これくらいでお礼になるのなら。近いうち、食事に招かせていただきます。では、また。」そういうと、イナメルは宿を出て行った。そして、入り口からたくさんの兵士やら町民やらがわんさか入ってきて、宿はいっぱいになった。
「何者だあんた。」
「すげえ強いよな。」
「姫様とたくさん話やがって。くそ～、うらやましい！」ローランドはあっという間に囲まれてしまった。
「おやじ、今日は宴会だ！旅人に感謝と歓迎の宴だ！みんな、飲むぞー！」おおーと声を合わせる人々。宿は人でいっぱいとなり、人

々はローランドをねぎらった。
「あんた、どこから来たんだい。」
「ボルデナ。」ローランドは天井を見上げて言った。
「ボルデナ！大陸の端じゃないか。どうやってきたんだ。」
「まぁ、歩いたり、たまに馬車に乗せてもらったりしてな。」ローランドは苦笑した。
「あの剣技はなんだい？」一瞬答えに詰まる。
「旅していくには金がなくてな。時々護衛やらやって旅費を稼いでたんだ。」
「なにしにこっちへ？」今度はほんとに固まった。
「……借りがあるんだ。返さなきゃならない借りが。」ぼそっと暗い声で答えた。だが、酒が入っている人々にはローランドの無表情ながら、見る人を恐怖させる怒りをにじみだしている顔に気付かなかった。
「今日は助かったよ。」となりに男が腰かけた。それはダグダだった。
「助けられたのはこっちの方だ。」
「君は用心棒もするのかい？」と、ダグダは尋ねた。
「金がないときはな。」
「この戦、手を貸してくれないか。」ダグダは真剣な面持ちで言った。
「俺一人でも雇わなきゃいけないほどなのか。」ローランドは質問に質問でかえした。ダグダは声をひそめて言った。
「ああ。ここの連中も口には出さないが、このままでは負けるだろう。手を貸してはくれないか。報酬はたっぷり払う。」ローランドはしばらく考えてから答えた。
「悪いが断るよ。戦に手を貸すと、相手の国に恨まれる。相手の同盟国とかにも目を付けられちまうと、厄介だ。そうでなくても、俺はさっき何人も切っちまったからな。」ダグダは肩を落とした。
「そうか、残念だ。」

「すまないな。力になれなくて。」ローランドは心底すまなそうな顔をして言った。
「いや、いいんだ。ダメでもともとだと思っていたし。ただ、今日の君の活躍を見て、仲間になってくれればこれほど頼りになる奴はいないと思ったんだ。」
「買いかぶりすぎだ。おれは大した人物じゃない。」ローランドはテーブルに視線を落とした。
「そんなことはないさ。君は俺たちを救ってくれたんだ。」ローランドは居心地悪そうに身じろぎした。
「そういえば、相手はどこなんだ。」
「あれ、そういえば言ってなかったか。コーンウォールだよ。」ローランドはすごい勢いで立ちあがった。
「コーンウォールだと！？」ローランドの大声に、酒場は静まり返った。
「あ、ああ。どうかしたのか？」ダグダは戸惑いながら答えた。ローランドはしばらく立ち尽くしていた。周りがざわめき始めた。突然、ローランドはテーブルに足をかけると、長椅子に立てかけていた剣をとり、手の中で回転させてテーブルにつき立てた。
「前言撤回だ。用心棒の件、引き受けさせてもらう！」ダグダは一瞬状況が理解できなかったが、やがて興奮していった。
「ということは、手を貸してくれるんだな！？」
「ああ、この戦、俺が勝たしてやる。どんなことをしても勝たせてやる！」酒場から歓声が上がった。ローランドは笑みを浮かべていた。酒場の者は誰にも気づかなかった。ローランドの目に復讐という名の暗い炎がらんらんと輝いているのを。

第二話　大きな友達

朝日が昇り始める前、薄明の中で、ダグダは訓練場へと続く道へと歩いていた。訓練は本来なら朝日が昇り切ってから始まる。だが、人一倍やる気だけはあるダグダは、毎日誰よりも早く訓練場へ来ていた。それに、彼は訓練場から見える朝やけが好きだったのだ。訓練場は、町の城壁からほど近いところ、他の建物よりも高い所にある。そこからの景色が好きなのも、彼が誰よりも早く訓練場に来る理由だった。

しかし、その日は一番ではなかった。訓練場への階段をのぼりはじめた時から、誰かが先にいるのがわかった。誰かの声が聞こえたわけではない。だが、棒などを振ったときに聞こえるひゅんひゅんという音が聞こえたのだ。階段を昇るにつれ、その音は一段と強くなっていった。ダグダは、素振りでこんな音を出せる兵士が仲間にいただろうかといぶかしんだ。階段を登り切り、訓練場を見渡すと、音の原因がわかった。

訓練場の中心で一心不乱に剣を振るう男がいた。ローランドだった。ローランドは舞踏のような華麗な足さばきをしながら剣をふるっている。その舞は美しいと同時に激しく、剣がどのように振るわれたのかすらわからなかった。

ローランドは感嘆たる思いで舞を凝視しているダグダに気づくと、舞をやめて近づいてきた。

「おはようダグダ。君はずいぶん早くに訓練するんだな。」ローランドはダグダに近寄って言った。

「それはこっちのセリフだよ。それにしても、すごいな君は。あんな技を見たのは生まれて初めてだよ。」ローランドは照れ臭そうに笑った。

「そういってくれるとうれしいよ、相手が技を知らないのは強みだから。だが、剣を振るうのも久しぶりでな、大分腕がなまってしま

ってる。」と、眉を下げてかぶりを振った。ダグダは今ので腕がなまっているとしたら、全盛期のときはどれほどのものなのだろうと思い、改めて目の前の男を引き込めたことを喜んだ。
「にしても、訓練にはまだ早いんじゃないか。そうだろうと思って、この時間にしたのだが。」
「確かに訓練には早い時間だけど、僕はここから見える朝焼けが好きでね。ほら、ごらんよ。」ダグダは城壁のほうを指差した。ローランドがそちらに目を向けると、世界が朝やけに包まれる瞬間を見た。しばらく二人は何も話さず、ただじっと朝やけを眺めていた。朝焼けが収まり始めたころ、ダグダが切り出した。
「なぁ、せっかくだから、組み手をしてくれないか。勿論、俺が相手じゃ君には物足りないだろうけど。」ダグダは先ほどの舞を思い出しながら言った。ローランドはうなずいた。
「むしろこちらからお願いしたい。相手もなしに剣を振ることほど退屈なことはないよ。それに、この国の兵士がどれくらい強いのかも把握しておきたい。ダグダは兵士の中じゃ強いほうか？」ダグダは苦笑した。
「いや、むしろ弱いほうだね。出なきゃこんな朝早く訓練場には来ないさ。」
「そうか？だが、常に鍛錬を怠らないものはだれよりも強くなれる。俺はそれを経験で知っている。」ローランドは訓練場の隅に置いてある訓練用の木剣を取り、昨日の戦いで手に入れた抜き身の剣を置いた。そして一本をダグダに放った。
「へえ、それは誰だい？」ダグダは投げられた剣を受け取った。ローランドはにやりと笑った。
「この俺さ。」

ローランドと訓練を始めてから三十分後、兵士たちが集まり始めたころ。ダグダは汗だくになって地面に倒れていた。
「やばい・・・・・・、死ぬ・・・・・・。」ローランドは済まな

そうに笑い、倒れているダグダに手を差し出した。
「いや、お前は言うより強い。これだけガッツのある奴は久しぶりだ。まぁ、そのせいでつい熱が入っちまったけど。」ダグダは差し出された手をつかんで、よろよろと立ちあがった。
「これから毎日組み手をすれば、すぐに強くなれるぜ。」とローランドは請け合った。
「これを毎日・・・・・・はは・・・・・・考えとくよ。」ダグダは膝に手をついた。
「大丈夫、お前ならきっとできる。それにしても、まだ訓練は始まらないのか？」ローランドは訓練場を見回した。兵士はだんだんと集まってきているし、幾人かは自主的な練習を始めているが、まだ組織だって訓練している様子はない。
「ああ。訓練は少将が来てから始まるんだ。最初に全体での基本訓練をした後、部隊ごとの訓練に入る。弓隊や騎馬隊の訓練場は別にある。ここは総合訓練場兼歩兵訓練場なんだ。」とダグダ。
「にしたって、始めるの遅くないか？とても戦をしている国には思えん。」ローランドは兵士たちの様子に腹をたてているようだった。確かに、一部を除いて兵士たちのほとんどは談笑し、地べたに座っている。
「君の言う通りだ。この国は平和ボケしてしまってる。前線の兵士たちに物資を送りに行くと、いつも言われるよ。『お前らはなんでそんなにへらへらしている、俺たちは命がけで戦っているというのに』ってな。」ダグダは顔を怖くして兵士のまねをした。ローランドはうなずき、何かを考え込むように城壁の外へと目を向けた。
　それから二十分ほどたつと、一人の男がやって来た。兵士たちは入って来た男を見るなりあわてて敬礼し、地べたに座っていたものはもたついて転ぶものまでいた。
「誰だ、あのちびデブ？」ローランドは入って来た男を指して言った。
「ピグ少将だ。あんまり変なこと言うなよ？」ダグダは注意したが、

その顔は少し笑っていた。
「フン、鎧を着て戦うより豚と一緒に飯食ってるほうが似合いそうなやつだ。戦いじゃてんで役に立たんな。訓練もあいつが指図するだけだろう？」
「確かに。でも、訓練しなくても私は強いからいいとかいつも言ってるよ。皆もそれは嘘だと知ってるが、上には逆らえないし、ほら。」と、小太りの男の隣を歩く対照的に大きな男を指す。
「あいつがいるんじゃな。昔、ピグは少将にはふさわしくないと言ってたやつらがいたんだ。どうなったと思う？」
「さぁ、どうなったんだ？」ローランドは感心なさげに行った。
「全員あいつに殺された。あいつの振るう斧は甲冑を簡単に砕くんだ。全員剣ごとぶった切られたよ。」ダグダはその惨状を思い出して身震いした。
「へぇ、そいつは面白い。」ローランドは大男を見てにやっと笑った。ダグダはその悪戯そうな笑みを見て言った。
「何かやる気か？」
「さぁな。ほら、早くしないと訓練が始まるぞ。」
「君はいかないのか？」ローランドは腕組をしたままここから動こうとしない。
「おれは手を貸すと言ったが、兵士になるとはいってないからな。まぁ、少し見物させてもらうよ。」ダグダは心配だったが、この男は俺が何を注意しても聞かないだろうとあきらめ、他の兵士たちに混じりに行った。

訓練が始まった。兵士たちは掛け声をかけながら素振りを始める。
「声が小さい、声が。」ピグ少将はにやにやと笑いながら、兵士たちを見て回る。と、訓練場の隅で腕組をしているローランドを見つけた。
「そこのおまえ！何をさぼっておる、早く列に入らないか！」ピグはローランドに向ってどなった。

「おれは豚に指図される覚えはねえよ。さっさと豚小屋に帰れ、豚。」ローランドはピグのほうを見もしなかった。
「き、貴様、わしを愚弄したらどうなるかわかっておるのか？」
「ぶーぶーわめくな豚。おれは豚肉は好きだが、豚は嫌いなんだよ。」ピグは怒りに顔を真っ赤にした。
「くそ、ハーグ！、こいつをたたきのめせ！」ピグは大男に命じた。
「おい、いいのか？おれは姫様の客人とされてんだぜ？」ローランドはにやにや笑って言った。
「訓練中の事故と言えばいいだけのこと。わしの訓練では、そういうことはしょっちゅうだからな！」ピグは手振りでハーグに合図した。ハーグはうなずき、斧を手にとってローランドの前にのしのしと歩いてきた。兵士たちはすでに訓練の手を止めていた。
　ローランドとハーグの身長差は子供と大人ほどだった。兵士たちのだれもがローランドに勝ち目はないとおもった。ダグダですらそれは同じだった。
「まった。そういうことなら、ちゃんとした訓練てことで、皆が俺たちの戦いを観戦できるようにしたい。いいだろ？」ローランドは焦ることもなく言った。
「いいだろう。お前たち！今から実戦訓練を行うから、よく見ておくように！」ピグは高らかに言い放った。ハーグは斧を構えた。
「お前、構え、ない、か？」ハーグは初めて口を利いた。それは南部なまりのある片言の言葉だった。ローランドは腕組をしたままで、剣を持ってすらいない。
「お前、結構親切だな。いいよ、このままで十分だ。」ローランドは腕を広げた。
「・・・・・・おまえ、侮辱してる？」
「そうだとしたら？」とローランド。
　ハーグは唸りを上げて斧を振りかぶると、大きくなぎ払った。ローランドはその攻撃を難なく伏せてかわし、あいてを回り込むように左にサイドステップをした。

「いいね。まずまずだ。もっと思いっきりやれ。」大男が体をひねりながらもう一度なぎ払うと、それも伏せて今度は右に回り込む。ローランドは振り下ろされた斧を半身になってかわし、続きざま払った斧を後ろに飛んでよける。ハーグは何度も何度も一撃必殺の斧を振るうが、ローランドはひらひらと舞うようにかわす。斧がさらに激しくふるわれるても、ローランドの舞はゆっくりとしているように見えた。兵士たちには、まるでハーグが蝶々をとらえようとする子供に見えた。子供がどれだけ腕を振り回しても蝶をつかめないように、ハーグが玉の汗を流しながら斧を振るうのに、ローランドは汗一つ掻かず涼しげな顔でかわしている。

ハーグは目に見えて疲弊していたが、それでもなお斧を振るった。ローランドはいつでもハーグを倒せたが、何もせずかわし続けた。ピグはハーグの思わぬ苦戦にいらついていた。

「ハーグ！なんだその情けない有様は！妹がどうなってもいいのか！」ハーグはその言葉を聞くと、唸りを上げてローランドに猛然と切りかかった。ローランドは大男の盛り返した鋭い攻撃を、先ほどより余裕なくかわした。

「妹？それはどういうことだ？」ローランドはハーグに問いかけるが、ハーグは耳を貸さなかった。斧をさらに速くふるい続ける。だが、ただでさえ重い斧をローランドの舞に合わせて振るっっていたハーグの握力は限界に来ていた。

斧を大きくなぎ払ったとたん、手からすっぽ抜け、斧はピグの頭上数センチを掠めて飛んで行った。ピグは小さく悲鳴を上げた。ハーグは疲れ果て、遂に膝をついた。

「なあ、もういいだろ。おまえはここの兵士とは違う、戦いを知っている誇り高き戦士の目をしている。どうしてそうまでしてあいつに従うんだ？」ハーグは息を切らしながらも、その眼はローランドに向けている。

「ネラ、人質。俺、家族亡くした、部族亡くした、食べるもの亡くした。ネラなくしたら、おれ、ひとり。それはいやだ。いやだ！」

ハーグは雄たけびを上げてたちあがり、ローランドに殴りかかった。ローランドには、それは悲鳴に聞こえた。ローランドはハーグのこぶしをかわして体の内側から背中にするりと回った。
「わかった。あとは俺に任せろ。」ローランドはハーグの後頭部に強烈なひじ打ちをかました。ハーグの体はよろめき、地面に倒れた。それをローランドは支え、ゆっくりとおろしてやった。
「手当てをしてやってくれ。」ローランドは最前列にいた兵士の一人に言った。兵士はあわてて礼をすると、仲間に声をかけてハーグをタンカに載せ始めた。
　ローランドは剣を取ると、腰を抜かして呆然としているピグへと歩みよった。
「おい豚。ハーグの妹はどこだ」ピグは自分が間抜けな体勢で座り込んでいるのに気づいて立ち上がると、ローランドに言った。
「おまえにはかんけいないだ・・・・・・。」
「答えろ！！俺は今すごく虫の居所が悪いんだ！！ごちゃごちゃ抜かすとその舌引き千切ってお前に食わせるぞ！！」ローランドはいきなりピグにつかみかかると、襟をつかんで小さな体を持ち上げ始めた。兵士たちはローランドの怒り様に驚いた。
「や、やめろ、おろせ！」ピグは足をじたばたさせてもがいた。ローランドはピグを地面に思いっきり叩きつけた。ピグは顔面から落とされ、鼻と前歯が折れた。
「は、鼻が！歯が！」ピグは鼻と口を両手で押さえて泣き叫んだ。ローランドはピグを蹴り飛ばしてあおむけにさせると、剣をのど元に突き立てた。ピグはヒッとひきつった声をあげ、泣き叫ぶのをやめた。
「早く答えな。それとも死にたいのか？」ローランドの声は冷たく、鋭かった。兵士はその声を聞いて背筋が凍るのを覚えた。だが、ピグはその声ではなく、ローランドの目、黒い怒りに縁取られた瞳が自分を睨むだけで殺そうとしているかに感じていた。ピグは震える声で泣きながら懇願した。

「わ、わかった、教える、教えるから、殺さないでくれ、殺さないで」ローランドはゆっくりと剣を下げると、ピグを立たせた。
「案内しろ。」ピグがしゃべらないでいると、ローランドはピグの髪をつかんでのど元に剣をまた突き立てた。ピグはローランドにひっ立てられながら訓練場を後にした。兵士たちは困惑しながらもローランドたちについてくることにした。
ピグは街の中にある小さな家へとローランドを案内した。
「ここにいるのか？」ローランドはピグに言うと、ピグは必死にうなずいた。ローランドはピグを兵士たちに放った。
「そいつを逃がすなよ。脅されても従うな。」ローランドは兵士たちにいい、家へと入ろうとした。
「これはなんのさわぎです！？」兵士たちは驚いて振り返った。
「姫様！」イナメルは兵士たちが道を譲る中を通り、ローランドのもとへとやって来た。
「ローランド様、この騒ぎはいったい何事ですか？」イナメルは努めて平静に言ったようだったが、その声には怒りが混じっており、兵士たちがざわめき始めた。
「ローランドでいいといったろう。」ローランドは中に入ろうとした。その手をイナメルがつかむ。
「ローランド、これはなんですか。どうしてピグ少将はこんな大怪我を？しかも誰も手当てしないなんて！？」ピグは助けが来たと言わんばかりに兵士の手から逃れようともがいて言った。
「こいつが私に暴行を働いたのです、姫様！」姫はローランドを見た。
「本当なのですか？」ローランドはなんでもないという風に言った。
「ああそうだ。鼻と歯をへし折った。」
「ローランド！なんということを！」
「そいつほどじゃない。こいつはハーグの妹を人質に取ってやがる。あの哀れな戦士のたった一人の家族をな！」ローランドはイナメルの腕を振りほどいた。

「そんな！？ピグ少将、それは本当ですか！？」
「いえ、あの、それは・・・・・・。」
「聞く必要はない。今にわかる。」ローランドはそういうと玄関へと向かって行った。
　ローランドは荒々しく家のドアを開けた。途端、剣を持った男がローランドに襲い掛かった。兵士やイナメルが声を上げる前に、ローランドは男の振り下ろした剣をよけざま剣のつかで相手の側頭部を打った。男は壁に吹き飛ばされてまた頭を打って地面に倒れた。皆があっけにとられる中ローランドはずんずんと家の中へとはいっていく。
　家の中は静まり返っていた。ローランドはためらいもせずまっすぐに家の奥へと進む。二つ目の部屋を通り過ぎた後に、そこから男が飛び出し、同時に前方からもやって来た。ローランドは前から来た男のはなった突きをかわして男の手首をつかみ、ぐっとひねって剣を握らせたまま後ろから来た男の手首を剣の腹で打った。前から来た男の手首は鈍い音を立てて折れ、後ろから来た男は剣を落として手首をつかんだ。ローランドは後ろから来た男のソクトウ部を剣の腹でたたき、前から来た男の後頭部をつかで殴った。二人は床に伸びた。ローランドはさらに先に進む。
　一番奥の部屋には、ハーグの妹、ネラが椅子に縛られてさるぐつわをかまされていた。そこには一人残った男がネラの首に剣をかけていた。
「く、来るな。こ、これ以上近づいたら、こいつを殺すからな！」男は声を震わせていた。
「殺す？やるならやれよ。」ローランドは歩みを止めなかった。男は剣をネラの首筋にあてた。その首から血が流れ、ローランドは歩みを止めた。男は内心ホッとしながら言った。
「脅しじゃないぞ。これは警告だ。武器を捨ててここからたちされ！でないとこいつを」
「その子を殺したらお前を殺す」ローランドはまた歩き始めた。男

はもう一度強くネラの首に剣を当てたが、もうローランドは止まらなかった。男は剣を落とし、膝をついてローランドのズボンをつかみ、すがった。
「頼む、ころさないでくれ」
「わかった」ローランドは剣を放り投げ、思いっきり男を殴った。男は床にたたきつけられた。ローランドはふぅっと息をつくと、剣を取ってネラのさるぐつわを外した。
「ごめんな、少し怪我させちまった。」そ子には先ほどの恐ろしさへみじんもなかった。ネラは首を横に振った。
「いいの。おじさん、助けに来てくれたんでしょ？」ローランドは縄を解きながら言った。
「そうだよ。君のお兄さんとは友達でね。それより、君はお兄さんと違って片言じゃないんだね。」
「うん。ここの人の言葉を聞いて覚えたの。」ネラは縄をほどかれて立ち上がると、ローランドの手をとった。
「兄さんと友達なんだよね。いつから友達なの？」ローランドは家の出口へと向かいながら言った。
「いまさっきから」

ピグはネラを監禁した罪で降格処分となった。普通なら、ばれても罪にはならなかったろうし、あったとしても降格処分すらあり得なかったが、その場にイナメルがいたのが悪かった。降格したのはいいが、そのあとを誰にするかが問題となった。結局小隊長の一人から選任することになったが、こう立て続けに部隊の隊長がいなくなっては大変だということになった。その時、兵士たちからローランドをという声が上がった。本来ならあり得ないことだが、ローランドにはピグを降格させた責任もあるとして、イナメルが決定するよう促した。隊長たちは不服だったが、イナメルを邪険にするわけにもいかず、兵士たちもそうしろとうるさいので、昨日の戦いで戦死した部隊長の後釜にローランドを据え置いた。

「ずいぶん早い出世になったな。」ダグダは二段ベッドの下から声をかけた。ローランドは客人から一兵士となったからといって、兵舎で寝ることにしたのだ。
「おれもこんなことになるとは思わなかったがな。だが、いずれは出世するつもりだった。」
「へえ、ずいぶん野心家なんだな君は。」
「そうじゃない。お前は賢いし、信頼できるから言うが、この国の今の状態ではコーンウォールには勝てない。兵士は錬度が低い上に隊長がああではな。おれはこの戦、絶対に勝たせる気だ。そのためには兵を強くしなければならないし、指揮をする必要がある。まずは俺の部隊を強くする。この国で一番強い兵士に育て上げてやる。」
「え、おれも同じ部隊なんですけど・・・・・・。」ダグダは不安もあらわに言った。
「そうだな。お前と一緒の部隊とは嬉しいぜ。今日よりも訓練はきつくなるから、そのつもりでな。」ローランドはシッシと笑った。ダグダは不平を漏らし、ため息交じりに言った。
「まぁ、他の部隊長よりはましか。少なくとも腕は立つし馬鹿じゃない。」
「それは保障しよう。」ローランドは請け合った。しばらくの沈黙があった後、ダグダは一番聞きたかったことを聞いた。
「なんであんなことをしたんだ？」ローランドはしばらく考えてから答えた。
「さぁな。最初は、あいつを兵士として仲間にできたら心強いと思ったんだ。だから、剣は使わなかった。だけど、なんだろうな。あの豚に無性に腹が立ったんだろうよ。」と、自分の感情に答えをつけた。ダグダは納得したのかどうかは知らないが、それ以上聞こうとはしなかった。
　本当は豚やろうがむかついたわけじゃない、とローランドは心の中で言った。
「あいつが俺と一緒になってほしくなかった。全部失った悲しみを

味わう奴を見たくなかったから。」ローランドは眠りにつこうとしたが、過去の記憶を思い出してしまってねむれなかった。
　その時、誰かが部屋をノックした。
「だれだ。」ローランドは返事をした。
「少し、いいか、話、ある。」声はハーグだった。ローランドははね起きてドアを開けた。勿論ダグダを起こさないように。
「なんだ、話って。」ローランドは後ろ手に扉を閉めた。ハーグは松明を持ち、背後の壁に大きな影を作っていた。
「ありがとう。妹、お前助けた。心から、礼言う。」ハーグは大きな手を差し出した。
「妹、お礼。」ローランドが手を出すと、ハーグはその手に小さなペンダントを落とした。それは木を削って掘ったもので、葉を茂らした木の形に彫ってあった。
「これは・・・・・・？」
「お守り。ブル族、木、守り、木、守られる。」ローランドは早速ペンダントを首にかけた。にっこりと笑ってハーグを見ると、ハーグも微笑んでうなずいた。
「ありがとう。大事にするよ。」ローランドはドアノブに手を懸け、中に入ろうとした。が、ハーグはそれを止めた。
「俺、恩返ししたい。お前と戦う。」ローランドは喜びたかったが、それを断った。
「恩返しなんてしなくていい。おれとおまえは友達だ。友達を無理に戦わせて危険な目にあわせたくない。」ハーグは驚いた。
「ハーグとローランド、友達・・・・・・？」
「ああ、俺とハーグは友達だ。」ローランドはにっこりと笑って言った。ハーグの顔に笑みが広がった。
「ローランド、友達。友達、仲間。おれ、ローランドの仲間、なる。」ハーグは興奮した様子で言った。
「ああ、それなら喜んで。」ローランドは手を差し出した。
「なに？」ハーグは握手がわからなかった。ローランドは笑った。

「友達は握手するもんだよ。」ハーグはああ、とうなずいて、ローランドの手をしっかりと握った。

「なんかいいことでもあったか？」ダグダは忍び足で上の布団に入るローランドに言った。にやけた口調からすると、話は全部聞いていたらしい。

「ああ。友達ができたんだ。すごくいい友達が。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7390f/

英雄

2010年10月28日03時11分発行